

# 藤井隆史&白水芳枝 VS

## 中井恒仁&武田美和子

### ピアノ・デュオという新鮮な音楽

「いや驚きました。感激です」。音楽研究家の松本明氏からお電話を頂戴して、私はそのとき、「そうですねか」としか答えようがなかった。

2年ほど前のことだったと思う。『ドゥオール』と名乗るピアノ・デュオの存在を評論家の某氏から教えられ、その話を松本氏に伝えた。彼は折良く近隣でその2人のサロン・コンサートがあったとかで、「聴いてみました。何と、ブラームスの『交響曲第一番』のピアノ連弾版なるものを、全楽章暗譜で弾かれたのですが、それがいいんですねえ。大感激でした」と報告を下さったのである。思いなしか、電話口の声の上擦って聞こえた。

4手ピアノ連弾と2台ピアノという音楽の分野について、「不勉強！」と叱られたら一言もないが、私は最近、「認識不足だったのではないか」と思い始めている。長いこと、家庭内か友人仲間とのつれづれなるままの『遊び』、あるいは名手2人の『余技』だとか考えていなかったからである。その昔、フリードリヒ・グルダとともに「ウィーンの若手三羽鳥」と謳われたパウル・バドゥラースと謳われたパウル・デームスが録音したモーツァルトの「四手のためのピアノ曲全集」を日本に紹介したのは私であるが（アマデオ原盤『トリオ・レコード』、そのときも2人の大名人の『余技』だという程度の認識しかなかった。しかし冒頭の松本発言に背中を

押されるような思いで、長年続いている音楽教養講座に來演をお願いしたり、お2人のピアノニスト藤井隆史&白水芳枝ご夫妻の自主リサイタルに足を運んでみて、『4手』というスタイルが決して『遊び』や『余技』ではなく、れっきとした独立の演奏芸術の分野（ジャンル）であることを教えられたのである。連弾にせよ、2台ピアノにせよ、4手でなくては表現不可能な、高度な中身を持った音楽の世界がそこにはあった。

また同じ頃、「こちらも凄いですよ」と紹介された中井恒仁&武田美和子のピアノ・デュオも、直接に演奏に接してみると、楽しくはあったが、その音楽的レベルの高さは、とても「遊び」などという言葉で評しては申し訳ないような高水準の内容を持っていた。藤井と白水は共に東京芸大卒。ドイツのマンハイム音楽大学の大学院でソロとデュオを学んだ。「デュオのレッスンを1週間に4時間ずつ2回、4年間専門の教授から受けました」という学習歴を2人から聞いて私は目が覚め、彼等の演奏水準の高さが納得できた。2人はそれぞれ国内外のコンクールに、単独で上位入賞を果たしているピアノの名手であるが、その2人にしてこれだけの研鑽の歲月を要するほど、ピアノ・デュオの世界は奥深いものだったのである。ブラームスの交響曲の連弾版について、藤井は「作曲者本人の手になるもので、彼の時代にはCD





ドゥオール (藤井隆史 & 白水芳枝)  
2004年にドイツで結成後、国内外にて150以上のステージを踏む。藤井隆史は東京芸大、同大学院にて植田克己、K. シルアに師事。現在、東京芸大及び武蔵野音大にて後進の指導に当たる。白水芳枝は、東京芸大卒業。空閑春子、井内澄子に師事。現在、国立音楽大学、共立女子大学非常勤講師。ドイツ・マンハイム音楽大学大学院でR. ベンツ、P. ダン両氏に学び、コンツェルトエグザメン課程(ソロ)及びピアノ・デュオ科最優秀修了。CDに「Deu'or」「SYMPHONIE」。

なんて無かったから、曲をオーケストラ版で聴こうと思っても、聴く機会は極めて限られていました。「第一交響曲」にしたって、ピアノ連弾版でしか聴いたことのない人が多かったのではないのでしょうか」と語る。そして「私達は、総譜(スコア)にある楽器の音を無理にピアノで模倣するよりは、ブラームスの書いたピアノ音楽に連弾のソナタだと割り切って、更に

京芸大卒、但し学んだのはミュンヘンの大学院である。そしてこの2人、コンサートではソロでも妙技を披露する。特に中井恒仁のブラームスと武田美和子のリストは、国際的にみても第一級だと思ふ。会場は華やかさを増すし、とにかく楽しい。それぞれ、ソロのCDをリリースするほどの腕前。このデュオは2010年の3月訪独、本場で大成功を収めて、再

暗譜で弾くことに決めました」と、挑戦の内幕を話してくれた。最近発売(リリース)されたCDの、音楽の流れの自然さは、こんなユニークな曲の解釈と、2人の卓越した演奏技術の産物だともう一方の

中井&武田夫妻のデュオは、これも東

訪も決定したらしい。現地新聞評の抜き書き。「新鮮な音楽的対話の広がり、深み、崇高さ、超越したスケールの大きさに、クンケリッハレの聴衆はただただ仰天し、圧倒されるばかりであった。……ブラームスのワルツ作品39の……ブラームスらしさ、まさにブラームスそのものの演奏は、(ナイト「ふさわ」)の称号を与えるに相応(シヨンドルフ新聞・一部意訳)。このあと、「拍手—アンコール—拍手—アンコールと、感動の嵐の Rondó はやまなかつた」という文章が続く。

中井恒仁 & 武田美和子  
それぞれのソロとデュオ共に「国際音楽コンクール世界連盟 WFIMC」加盟のコンクールで入賞しているピアノ・デュオ。夫妻で共に東京芸大、ミュンヘン音大大学院修了後、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学にて研鑽を積む。ピアノ・デュオをA. コンタルスキー氏に師事。1999年にデュオを結成し、同年「マレー・ドラノフ国際2台ピアノコンクール(USA)」第4位入賞。CDに「フマニョ組曲」「MOZART」。



Takeshi Nakano

1931年、長野県松本市生まれ。東京大学法学部卒業。日本開発銀行(現・日本政策投資銀行)を経て、ケンウッド代表取締役。レコード事業、音響機器生産等も担当した。現在、音楽プロデューサーとして活躍するほか、映像企業「アマナ」などの役員を務める。レコード・CDの制作で「ウィーン・モーツァルト協会賞」「文化庁芸術作品賞」などを多数受賞。著書に「モーツァルト 天才の秘密」「丸山眞男 音楽の対話」「ウィーン・フィル 音と響きの秘密」「丸山眞男 人生の対話」宇野功芳、福島章との共著による「クラシックCDの名盤」(いずれも文春新書)などがある。

クラシック音楽の歴史と伝統には、汲めども尽きぬ豊かな文化財が、掘り起こされるのを待って眠っている。ピアノ・デュオの世界——もつと脚光を浴びてもいいし、挑戦者が増えてもいいのではなからうか。